様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月　18　日現在

研究種目：　基盤研究（B）
研究期間：　2006～2008
課題番号：　１８３３０１１６
研究課題名（和文）　災害文化の記録・記憶と地域再生をめぐる環境社会学的研究

研究課題名（英文）　An environmental sociological study about a record/ memory of the disaster culture in a community

研究代表者
中村　治　（Nakamura Osamu）
大阪府立大学人間社会学部・教授
研究者番号：１０１８９０２９

研究成果の概要：水害現象を水害文化として長期的で経験論的かつ価値論的な視野からとらえることによって、総体としての日常生活世界の中で、水害被災当事者の生活の視点から捉え直し、生活再建や地域社会の再生のプロセスを環境社会学的に明らかにした。また、文書や写真などの水害記録を発掘し、聞き書きにより経験者の記憶を生活史として再構成しながら、これを災害教育としていかに次世代につなぎ水害文化の継承を図るか、その社会学的手法の開発に取り組んだ。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2007 年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2008 年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
年度			
年度			
総　計	15,200,000	4,560,000	19,760,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：生活環境，水害記録，自助共助，古い写真，地域住民参加，琵琶湖，淀川水系，環境社会学

１．研究開始当初の背景

20 世紀が富の生産と分配に社会的問題が集中した時代であるとするなら、21 世紀は、危険（リスク）からの回避の仕組みが、いかに地域や社会階層によって差別的に配置されるかが問題となる社会であろう。危険のひとつは、近代化の過程で静かにしかし根深くひろがってきた環境問題である。水や大気、大地そして動植物など人類共有の自然の利用と再生において、今、世界は大きな危機に立たされている。もうひとつの危険は、地震や水害などの自然災害であろう。21 世紀にはいって、日本や東アジアでは異常な数の台風におそわれ、水害が各地で頻発している。アメリカ南部でも前例のない規模のハリケーンが多発し、地域社会と人びとの暮らしを崩壊の危機におとしめていることは、地球温暖化政策への参画を拒否し続けてきたアメリカ社会にとって大きな政治問題とさえなっている。

これまで環境問題と災害はそもそも独立的に生起し、社会的にも研究的にも別の領域

と考えられてきた。しかし、地球規模で進む地球温暖化や気候変動の中で、環境問題と自然災害とが自然現象としても社会現象としても深く連関した領域であることが次第に明らかとなってきた。自然災害の中でも水害は、温暖化現象とのかかわりが深いことが気候学者などにより指摘されはじめている。と同時に、地震と比べ水害は、その発生予防政策が可能である、という意味で社会学的に重要な研究領域となる。しかし、これまで環境破壊の問題と自然災害現象を同一地平において比較しその社会学的意味を深めた研究はきわめてまれであった。

くわえて、急速な都市化の結果、たとえ水害常襲地に暮らしていてもそのことを知らない、あるいは関心をもたない新住民や若者、子どもがますます増えている。また、たとえ過去の水害被災者であっても、ダム建設や河川改修などのハード事業が進展することで、潜在的な危険性を関知する知識と感性を欠き、根拠の薄い安心感が広まっている。このような社会変容の中で、水害文化とでもいうべきもの、つまり川や水辺による恵みと災いに関する地域の自生的な知恵と知識に根ざし、地域自治の社会組織的な原点にもつながる水害文化は崩壊の危機にあり、それの継承発展の仕組みを考える必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究では、日本における環境社会学の理論的蓄積の中で、1980 年代初頭から提起してきた「生活環境主義」の理論構築と実践経験を援用しながら、水害現象を水害文化として長期的で経験論的かつ価値論的な視野からとらえることを目的としている。より具体的には、総体としての日常生活世界の中で、水害被災当事者の生活の視点から水害現象を捉え直し、生活再建や地域社会の再生の方向を理論的かつ実践的にさぐることを目的とする。

そのために、水害経験者や被災地において、文書や写真などの水害記録を発掘し、聞き書きにより経験者の記憶を生活史として再構成しながら、水害からの地域社会の再生のプロセスを環境社会学的に明らかにする。その上で、聞き書きや記録資料を元に、災害教育としていかに次世代につなぎ水害文化の継承を図るか、その社会学的手法の開発を行い、政策提案としてとりまとめることも視野に入れる。

３．研究の方法

これまでの自然災害や水害にかかわる研究レビューを行い、文献リストの整理とそのデータベース化を行う。その中でも留意するべきことは、河川工学や地理学など自然科学系の水害研究以外の社会科学的、人文学的な水害研究の文献を重視し、そこでの研究の論理を分析することにある。と同時に災害論の古典といわれる寺田寅彦の災害論、和辻哲郎の風土論、柳田国男の民俗学的論攷やその思想的背景である国学の文献を読みこみながら、特に本研究が重視する生活環境主義に基づいた論理と、近代技術主義モデルと自然生態モデルの意味構造を理論的に析出する。その中から、本研究で求める、水害を人びとの日常生活の総体の中で通時的に研究するための理論的特色とその方向を明らかにする。

それと並行して、各分担者が対象とする地域を選び、そこにおける過去の水害記録の収集を行う。具体的には、水害古写真や新聞情報などを活用した「写真資料提示型ディープインタビュー」を実施し、地元自治会のいわゆる区長文書など、できるだけ現場の被害者の生活状況を再現できる記録に焦点をあてるとともに、この研究プロセスそのものに、子ども、若者、新住民など水害経験のない住民からなる組織、自治会や学校、NPO 団体にかかわってもらう仕組みづくりをはかる。

４．研究成果

本研究では、日本だけでなく世界でもほとんど蓄積のない自然災害現象に、環境社会学、特にそのひとつの理論的主柱である生活環境主義からアプローチすることによって、「災害文化」の理論的フレームを提示するとともに、それを水害文化の世代間の継承と実践につなげる多くの知見を研究成果として獲得した。

(1)理論的フレームの提示

災害をリスクの一種としてとらえる社会学的研究はリスク社会論として 1990 年代に一世を風靡した。しかしどちらかといえば抽象的志向性の中で社会的実践にまで高められた研究はほとんど生まれてこなかった。また災害社会学や社会心理学の領域では、特に阪神大震災を契機として、災害発生時の地域社会の対応や地域社会の変動などに関する研究を生み出してきたが、いずれも短い時間軸の中で、被災場面に焦点をしぼるミクロな研究が主となっている。

一方、地震対策や水害対策において、現代日本においては主要な社会的主体である行政政策場面では、いわゆる「近代技術主義」に基づく合理主義的価値観が主流となってきた。そこでは「水量計測」という科学知に基づき、高度の技術と多大な財政負担を伴う治水のための物理的なハードな公共施設の建設（治水ダムや河川改修）と、一見合理的と想定される標準化され、社会関係の文脈を無視した避難情報の伝達が災害対処への主要施策となってきた。

日本では、長良川河口堰問題などの河川政

策論争に典型的に現れているように、「自然環境主義モデル」が環境問題への対抗的パラダイムを形成してきた。そこでは「アユか治水（水害対策）か」という二項対立の中で、アユなどの生き物を象徴化する自然環境主義が社会的政治的パワーを獲得してきたが、自然環境主義はひとたび洪水がおきると「アユよりも人の命」という論理の中で、その行き先をふさがれ、特に地元の水害被災当事者からの共感を得られないまま、被災住民の意思を無視して、いわば都市的インテリゲンチャ主導の河川の生き物保護活動と解釈される傾向にあった。

しかし、一見対立する「近代技術主義」と「自然環境主義」というふたつのパラダイムには共通性がある。つまり近代技術主義モデルと自然環境主義モデルは、いずれも生活世界に埋め込まれた総体としての「当事者性」と「総合性」を欠いており、近代社会固有の「専門化」と「脱文脈性」の罠に取り込まれていることである。

これに対し本研究においては、生活環境主義から、水害にアプローチする上での基本的な論点が、水害現象を捉える生活の論理を、歴史文化的にかつ被災者の立場から総体として、経験論的に「水害文化」として把握できることを示すとともに、そこでは、川や水辺にかかわる「恵み」も「災い」もともに自らの論理の中で対抗的に生み出してきた伝統がみられることをあきらかにした。

(2)社会構造問題の提示

とはいえ、生活世界も伝統も固定的ではない。生活世界における知識や実践は近代化の過程で変容し、再創造される。本研究においては、各分担者が対象とする地域での丹念なフィールドワークにもとづく成果をもとに実践性の面から重視すべき社会構造問題の特徴を析出した。具体的には、①日本においては急速な都市化による社会変容が進み、たとえ水害常襲地に暮らしていてもそのことを知らない、あるいは関心をもたない新住民や若者、子どもがますます増えていることである。それは、住宅所得の時に水害被害という地価や地域のプレシティジにとってマイナスとなる情報が社会化されていないという情報開示の問題とも根深くかかわっていると同時に、ひろい意味での「環境正義」問題の根ともつながっていること。そして、②たとえ過去の水害被災者であっても、ダム建設や河川改修などのハード事業が進展することで、潜在的な危険性を関知する知識と感性を欠き、根拠の薄い安心感が広まっていることである。この背景には河川テクノクラート主導のネポティスティックな治水行政の浸透があることをである。

このような社会変容の中で、地域の自生的な知恵と知識に根ざし、地域自治の社会組織的な原点にもつながる水害文化は崩壊の危機にある。河川工学の論理を柱とした官僚主導の近代技術主義モデルは日常生活世界に深くはいりこみ、それに依存し歓迎するという状況が生み出されている。

(3)水害文化の世代間の継承と実践

水害の履歴を日常生活の総体とむすびつけることは、被災の前触れ、その事前認識、被災時の家族・親族・職業状況、住宅や屋敷の配置、近隣関係、被災の具体的な内容など短期的な状況にプラスして、生活再生がいかなる社会的仕組みの中でなされてきたのか、その状況を今ふりかえってどう解釈できるのか、いわば生活史の中で災害経験を意味づける「生きられた災害経験」に昇華させるうえで重要である。

本研究では、(1)および(2)の成果を踏まえ、それぞれの被災者がおかれた地域社会の中で、連続的に被災をしてきた場合、どのような知識と知恵が生活の中に埋め込まれていたのか、それがその後、どうかわってきたのか、被災経験の中に埋め込まれてきた災害文化をあぶりだすことをインタビューの中での重要なねらいとしてきた。

これらの体験記録を地域社会や学校教育の分野でいかに伝達するべきか、その伝達手法の開発を被災地の自治会や町内会、学校教育現場と協力しながら方法を検討するとともに、上記のインタビューで発掘した被災経験者の中から、次世代への語りを了承してくれる人びとに呼びかけ、自己の経験を古写真や現場歩きをしながら伝承場面をつくりだした。そして、個人の経験とともに、地域社会として、河川の水防にかかわる自治組織の機能について組織論的検討を行いながら、水害文化の崩壊プロセスを個別の水害履歴地における記録と記憶の再生の中で研究として再構成しながら、この研究プロセスそのものに、子ども、若者、新住民など水害経験のない住民組織、自治会や学校、NPO 団体にかかわってもらう仕組みづくりを行うことの重要性を指摘した。それは、自らの命を自らが守る「自助」「共助」の仕組みを地域社会につくりだし、地域社会そのもののエンパワーが期待できる水害文化の再生への方向を目指すものとしてある。

(4)研究成果を踏まえた今後の展望

水害文化の理論的、実践的フレームづくりのために、日本の水害文化の相対的意味を他文化と比較することが必須である。本研究で獲得した成果をふまえ、今後、アジア・アフリカなど海外の水害被災地でのフィールドワークを継続的に実施するとともに、その比較理論化を推し進めていきたい。

	役割分担	事例研究地
中村	全体総括・災害はいかに表象されてきたかー京都の水害古写真にみる記録と記憶	京都の鴨川水系の大原川、八瀬川、高野川、岩倉川、さらには鴨川と合流する桂川を中心に
古川	地域社会にみる災害記録と記憶	琵琶湖・淀川水系の河川(知内・百瀬川)／ネパール(水環境調査)を中心に
鳥越	国学と民俗学は災害をどう認識してきたか	琵琶湖・淀川水系の河川(高時川)／霞ヶ浦周辺を中心に
松田	災害を飼いならすー水害常襲地での日常生活の論理	ケニア・ナイロビ川周辺を中心に
西城戸	災害はいかに伝達可能かー災害文化教育にみる記録と記憶	鴨川、桂川、木津川の「三川合流地点」と宇治川(巨椋池)を中心に
土屋	災害と地域再生の環境社会学的研究	琵琶湖・淀川水系の河川／能登半島地震被災地域を中心に

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）
①西城戸誠・川面なほ・石川誠，「災害教育の展開とその評価ー宇治川の水害学習実践を事例としてー」『京都教育大学附属教育実践センター教育実践研究紀要』9 巻：11-18，2009，査読無し.
②中村治，「周南市鹿野に見る水との関わり方の変化」『大阪府立大学紀要』第 3 巻：149-164，2008，査読無し.
③古川彰，「天然アユと近自然工法」『環境社会学研究』第 14 号：21-37，2008，査読有り.
④古川彰，「向地方性知識学的方法ー生活環境主義思想（中国語）」『地理環境与民俗文化遺産』：169-176，2008，査読無し.
⑤古川彰・鎌谷かおる，「滋賀県高島市知内区有文書目録(1)」，『社会学部紀要』104 号，関西学院大学社会学部：235-246，2008，査読無し.
⑥Hiroyuki Torigoe，Ecology of Punishment and Favor，Conserving Nature：20-28，2008，査読無し.
⑦西城戸誠，「日野市の用水路を巡る「市民参加」の現状と課題」『法政大学地域デザイン研究所報告書』：171-182，2008，査読無し.
⑧中村治，「岩倉の暮らしと岩倉川」『洛北岩倉研究』第 8 号，岩倉の歴史と文化を学ぶ会：1-12，2007，査読無し.
⑨中村治，「盆の行事」『洛北岩倉研究』第 8 号，岩倉の歴史と文化を学ぶ会：15-42，2007，査読無し.
⑩中村治，「葬式と岩倉川」『洛北岩倉研究』第 8 号，岩倉の歴史と文化を学ぶ会：43-47，2007，査読無し.
⑪中村治，「岩倉川と水害」『洛北岩倉研究』第 8 号，岩倉の歴史と文化を学ぶ会：48-62，2007，査読無し.
⑫ Matsuda Motoji，Overcoming of Predicament of Social Research，A.Furukawa ed.『Frontiers of Social Research: Japan and Beyond』，Trans-Pacific Press：1-18，2007，査読無し.
⑬ MARUYAMA Yasushi，NISHIKIDO Makoto，Tetsunari IIDA，The rise of community wind power in Japan: enhanced acceptance through social innovation，Energy Policy 35：2761-2769，2007，査読有り.
⑭西城戸誠・長野浩子，「用水路を維持・管理するのは誰か？ー日野市内用水路に関する意識調査による分析ー」『日野の用水路再生 2006』：87-93，2007，査読無し.
⑮西城戸誠，「日野市の用水路に対する市民の意識ー住民意識調査から」『大原社会問題研究所雑誌』592 巻：18-42，2007，査読有り.

〔学会発表〕（計 3 件）
① Matsuda Motoji，Forest Conservation Discourse as the Weapon of the Strong ―With a Special reference to Maragoli Forest Communities in Western Kenya―，2008 年 8 月 8 日，Chiang Mai/ Thai.
②Torigoe Hiroyuki，Beautiful Nature and Environment，World Congress of Rural Sociology，2008 年 7 月 8 日，Goyang/ South Korea.
③Furukawa Akira，Globalization and Local Knowledge，Work Shop of “Transfiguration of Local Knowledge in Globalization，2007 年 7 月 14 日，Beijing Norm University，China.

〔図書〕（計 16 件）
①中村治，「都市と近郊農村―近代化による＜循環＞の消滅」木岡伸夫編『都市の風土学』（全 364 頁）：187-202、2009，ミネルヴァ書房.

②西城戸誠，「「遠い水／近い水」と水害の記憶」鳥越皓之・帯谷博明編『よくわかる環境社会学』：66-67，2009，ミネルヴァ書房.
③土屋雄一郎，「共有地の悲劇と社会的ジレンマ」鳥越皓之・帯谷博明編『よくわかる環境社会学』：88-90，2009，ミネルヴァ書房.
④鳥越皓之，『「サザエさん」的コミュニティの法則』（全 188 頁），2008，日本放送出版協会.
⑤中村治，『洛北八瀬』（全 128 頁），2008，コトコト.
⑥中村治，「深泥池地区の暮らしと池」深泥池七人委員会編集部会編『深泥池の自然と暮らし―生態系管理をめざして―』（全 247 頁）：130-135，2008，サンライズ出版.
⑦中村治，「暮らしの中で」白幡洋三郎監修，井上章一・中村治・芳井敬郎編『京都市今昔写真集』（全 159 頁）：94-107，2008，樹林舎.
⑧中村治，「土に生きる」白幡洋三郎監修，井上章一・中村治・芳井敬郎編『京都市今昔写真集』（全 158 頁）：108-114，2008，樹林舎.
⑨中村治，「昭和の子どもたち」白幡洋三郎監修，井上章一・中村治・芳井敬郎編『京都市今昔写真集』(全 159 頁)：146-157，2008，樹林舎.
⑩古川彰，『村の日記　江州知内村「記録」1975-1948 翻刻』(全 618 頁)，2008，関西学院大学出版会.
⑪古川彰・山泰幸・川田牧人編，『環境民俗学－新しいフィールド学へ』（全 321 頁），2008，昭和堂.
⑫土屋雄一郎，『環境紛争と合意の社会学－NIMBYが問いかけるもの』(全 247 頁)，2008，世界思想社.
⑬松田素二，「「過去の傷はいかにして癒されるか　被害を物語る力の可能性」棚瀬孝雄編『市民社会と責任』(全 290 頁)：111-138，2007，有斐閣.
⑭Furukawa Akira，Village Life in Modern Japan: An Environmental Perspective（全 304 頁），2007，Trans Pacific Press in Melbourne，Australia.
⑮中村治，『洛北岩倉』（全 450 頁），2007，コトコト.
⑯Furukawa Akira，Frontiers of Social Research（全 351 頁），2006，Trans Pasific Press.

６．研究組織

(1)研究代表者

中村　治（Nakamura Osamu）
大阪府立大学人間社会学部・教授
研究者番号：１０１８９０２９

(2)研究分担者

古川　彰（Furukawa Akira）
関西学院大学社会学部・教授
研究者番号：９０１９９４２２
鳥越　皓之（Torigoe Hiroyuki）
早稲田大学人間科学学術院・教授
研究者番号：８００９７８７３
松田　素二（Matsuda Motoji）
京都大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：５０１７３８５２
西城戸　誠（Nishikido Makoto）
法政大学人間環境学部・准教授
研究者番号：００３３３５８４
土屋　雄一郎（Tsuchiya Yuichiro）
京都教育大学教育学部・准教授
研究者番号：７０４３４９０９